

令和5年度 研究推進計画書

研究推進委員会

- 1 研究形態 発表校 () 準備校1 () 準備校2 (○)

(該当するものに○をつけてください)

- 2 学校教育目標

未来を創造し、たくましく生きる生徒の育成

～地域・家庭とのつながりによるレジリエントな学校を目指して～

- 3 前年度の研究

- (1) テーマ

「できる」「わかる」授業の追求

～ふり返りを大切にし、学習意欲を高める授業づくり～

- (2) 成果と課題

【成果】

- ・市内研究発表会へ向けて、職員でふり返りを活用した授業づくりについて取り組んだ。伊丹市教育委員会事務局の指導主事に助言をいただき、授業改善に努めた。
- ・松中版の「ふり返り」の定義を職員で共有し、生徒にも周知することで、ふり返りの意義を教師と生徒で共通理解した。
- ・授業アンケートや学習アンケート等を積極的に実施し、生徒の現状を把握でき、より一層授業改善につなげることができた。
- ・「ふり返り」の明確化により、粘り強く学習する態度が多く見られるようになり、全国学力・学習状況調査においては、記述式の無回答率が下がった。
- ・オープンスクール等を通して、保護者に学校生活や授業中の生徒の様子を参観する場面が増えたことにより、保護者アンケートの「子どもは楽しく学校生活を送っている」「子どもは行事に楽しく参加している」の項目が向上した。
- ・前年度よりICTの活用が進み、ICT活用率が大幅に増加しており、生徒もICTの活用に慣れてきた。教科ごとに、ICTの効果的な活用について検討を重ねている。
- ・月2回、教科部会を実施し、そのうち1回を研修できる内容を取り入れた。
- ・夏期休業中に小中合同研修会を実施し、小学校との連携を図った。
- ・プチ研を企画し、職員のニーズに合った自主研修会を行った。
- ・校内研究授業を年2回実施することができ、特に11月の市内研究発表会へ向けて、夏期研修会、教科部会等を利用して、職員全員で指導案を検討することにより、様々な視点で研究授業を行うことができた。
- ・市内研究発表会の公開授業においては、生徒のふり返りを活かし、「問い」のある学び合いを発表することができた。

【課題】

- ・生徒の「授業はたのしくわかりやすい」の項目アンケート結果が4.9ポイント下がっていることから、生徒がたのしくわかりやすいと感じる授業づくりに課題がある。
- ・生徒アンケート「いろいろ教えてくれる」や「授業内容でわかりにくいことについて、先生に質問しやすい」、「授業の工夫に努めている」の項目で、「よく当てはまる」と回答した生徒が前年度より下がっていることから、より一層の授業改善が必要である。
- ・生徒、保護者アンケートの「学習の成果を適切に評価している」の項目で、「よく当てはまる」と回答した生徒と保護者が前年度より下がっていることから、評価方法の共通理解を図る必要がある。

4 本年度の研究

(1) テーマ

主体的に学ぶ生徒の育成

～自ら課題を見つけ、見通しをもち、ともに学び合う授業づくり～

研究仮説

- ・授業において、目標を明確にし、見通しをもたせることで、主体的に学習を進める子どもが育つ。
- ・本時や単元の終わりにおいて、自分の学びを振り返らせることで、新しい課題を見つけ、主体的に学習を進める子どもが育つ。

(2) テーマの設定の理由

これからの時代は、予測不可能な時代である。コロナ禍では様々なことが変容し、社会の価値観や考え方が大きく変わった。これまでの当たり前が進化し、今後も子どもたちは常に価値観や考え方をアップデートしなくては、予測困難な時代を生き抜いていくことは難しい。そこで、子どもたちに新しい知識・技能を獲得させ、それらの知識・技能を理解して使うことで思考力・判断力・表現力を養い、その学びを今後の人生や社会につなげさせたい。

昨年度まで「ふり返り」と「問い」のある学び合いを中心に据えて研究を推進してきた。「ふり返り」を行うことで、生徒自身が自ら学習の状況を把握し、主体的に学ぶ態度を育むことができた。また、教科部会を中心に授業や指導案を検討し、「問い」のある学び合いの場を設定し、グループ活動を通して、自己有用感を高めることができた。

一方で、生徒の「授業はたのしくわかりやすい」のアンケート結果が4.9ポイント下がっていることから、生徒がたのしくわかりやすいと感じる授業づくりに課題がある。生徒アンケート「いろいろ教えてくれる」「授業内容でわかりにくいことについて、先生に質問しやすい」という項目についても若干下がっている。また、「授業の工夫に努めている」のよく当てはまるがやや下がっていることから、生徒が生き生きと授業を受けていることがわかるような授業づくりをさらに行っていく必要がある。

今年度のテーマを設定するにあたり、校内研修会で現状や目指す生徒像について職員で共通理解を図った。現状としては、講義型の授業がまだまだ多く、理解しているように見えるが、深まりがなく、定着が弱いことや課題解決力が低く、やるべきことや困難に立ち向かう力が低い生徒が多いことがわかった。そこで、「問い」のある授業を中心に授業を実践していき、生徒がみずから課題を解決できる授業を展開していきたい。「問い」のある学び合いを行うことで、課題が見つかる。そして、「ふり返り」を行うことで課題の発見につながり、自ら「問い」が立てられる生徒を育成していきたいと考え、本テーマを設定した。

(3) 具体的な実践内容

①主体的に取り組む生徒を育成するための授業実践

- ・目標の明確化
生徒へつきたい力がわかる、ゴールの生徒の姿がイメージできる目標の設定
- ・ふり返し
深い学びへつながる「ふり返し」
次の「問い」へつながる「ふり返し」
- ・「問い」のある学び合い
生徒自身が「問い」をもつ、学び合いの場がある授業
個々の生徒に対応した授業
わかりやすくするためのスモールステップを仕掛けた授業
個々を認める、褒める場面のある授業
- ・UDの視点をもった学習環境の整備
- ・ICT機器の活用
- ・学習の手引きの活用
学ぶ意義を理解させ、学習に対する見通しを持たせる。

②公開授業の実施

すべての教師が年に1回、授業を公開する。

③データの検証

全国学力・学習状況調査、CRT、学習アンケート（毎学期）、hyper-QU（年2回）、スポーツテストの分析

④授業評価アンケート

学期ごとに生徒の授業評価アンケートを行い、授業改善につなげる。

⑤教科部会の充実

教科部会を行い、ふり返りの仕方や学習意欲を高める取り組みの共通理解を図る。

⑥自主研修会の実施

年間で7回の自主研修会「プチ研」を行う。

⑦小中連携

校区の小学校との実践交流

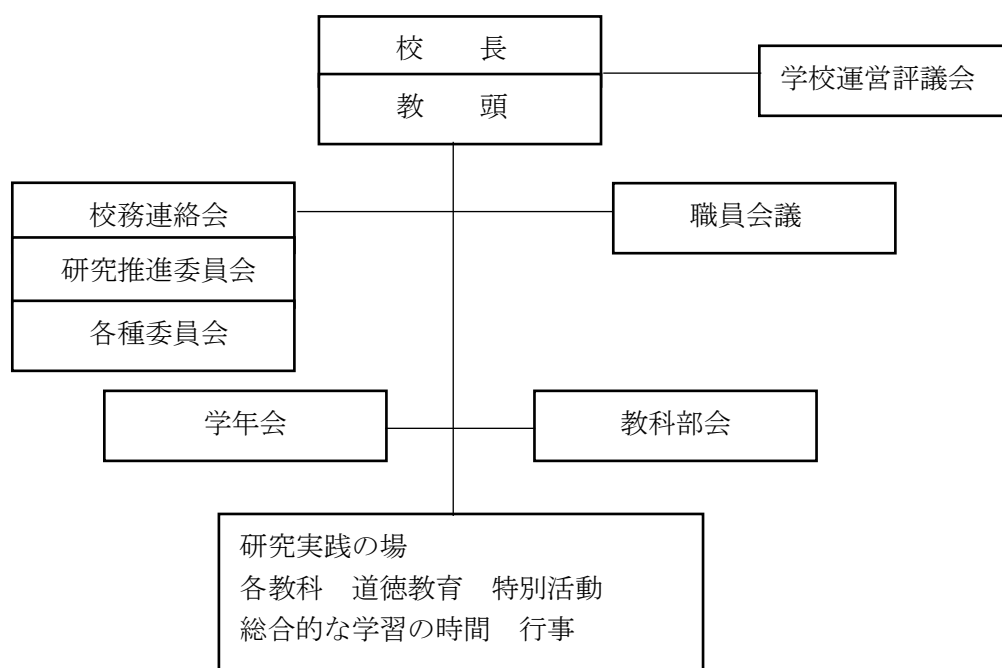
⑧連絡帳の改訂

先を見通す力を身につけるために連絡帳の内容を改訂した。

⑨GTの取り組み

毎日10分程度の基礎学習に取り組む。

(3) 研究推進体制



アドバイザー
武庫川女子大学 神原一之 教授
伊丹市教育委員会指導主事

(4) 研究推進計画

月	内 容	月	内 容
4	・研究概要の研修 ・アレルギー対応研修 ・生徒理解研修 ・「学習の手引き」作成 ・プチ研①	10	・プチ研⑥
5	・プチ研②	11	校内研修会（11月28日）
6	・校内研修会（6月20日）	12	・「学習の手引き」作成
7	・小中合同研修 ・プチ研③	1	・校内研修会（1月30日） ・hyper-QU 分析② ・プチ研⑦
8	・夏季校内研修会 ・hyper-QU 分析① ・「学習の手引き」作成 ・プチ研④	2	・C R T分析
9	・プチ研⑤	3	・「学習の手引き」作成

5 研究領域・教科等（該当するものに○をつけてください）

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| (1) () 学級経営 | (2) (○) 教科…教科名「全教科」 |
| (3) () 総合的な学習 | (4) () 教育課程 |
| (5) () 道德教育 | (6) () 人権教育 |
| (7) () 環境教育 | (8) () 福祉教育 |
| (9) () 生徒指導 | (10) () 情報教育 |
| (11) () 国際理解教育 | (12) () 特別支援教育 |
| (13) () 性教育 | (14) (○) 評価 |
| (15) () 特別活動 | (16) () その他「 」 |

6 研究発表日

発表日：令和 7 年に実施予定